



午睡とピクニック #1 碧とこゆり



ふありの書斎

2024年5月18日 00:00

碧SIDE

～ショート・ショート～

ぼくは、ベッドに眠るこゆりを見つめ、朝食のプレートをサイドテーブルに置いた。腰まで伸びた淡い琥珀色の髪が、ゆるやかにウェーブを描き、透明感のある白い肌は、やや病的でもある。白のキャミソールワンピースに、春色のピンクのストールを纏っている。

ぼくは、こゆりの肩に触れた。

「こゆり。朝だよ。朝食、作ってみたんだけど、食べない？」

ぼくの発言に、こゆりはガサガサと身動きをして、薄っすらと眸を開く。

「...碧ちゃん、わたし...まだ眠いの...」

今にも消え入りそうな細い声で呟くと、こゆりは再び眠ってしまった。

「あーあ。ぼくの彼女は眠り姫だな...」

クスリと笑って、ぼくは、サイドテーブルのメモ帳にペンを走らせる。

“今日はモデルの仕事が長引きそうなので、帰りは遅くなるかも。夕食は家政婦さんが6時に持ってくるよ”

「行ってきます」

* * * * *

ガサガサ ガサガサ

ベッドカバーを激しくゆすられ、ぼくは片目を開く。すると珍しく、こゆりが、

「あおちゃん、あおちゃん。凄いの！見て！」

と、弾んだ声で言う。昨日の撮影が朝方まで押し、ようやく帰宅してベッドに倒れ込んだのが、良く覚えていないが、その時はまだこゆりも寝ていた。

多分、それからまだ2、3時間しか経過していないのだろう。ぼくは^{まぶた}瞼をこすり、こゆりに微笑む。

「おはよう、こゆり」

彼女がこんなふうにはしゃいだ姿をするのは珍しい。いつもは、眠り姫だから。

「見てみて。すごい、お天気」

すると、こゆりが華奢な身体に力を加え、寝室の遮光カーテンを開ける。

「うっ...わ...」

窓から差し込む強い日差しに、ぼくは腕で光を遮り、眸を伏せる。

「ね？こんなに晴れたの、久しぶり」

「...そ...だね。公園に、ピクニックとか最適かな」

ぼくは、日差しに慣れると、ベッドから降りて、窓辺に近づく。あとから、こゆりが声を弾ませる。

「素敵！あおちゃんは素敵なこと、何でも思いつくのね」

ぼくは、あははと照れ笑いをして、こゆりの手を取り、引き寄せる。

「今日はこんな天気だからこゆりも元気なの？新しい君が見れて、ぼくは大発見だよ」

琥珀色の彼女の髪を手ぐしで梳きながら、首を傾げる。

「我が儘なの。...わたしの。あおちゃんに連れてこられて来て、これからはずっと一緒だと思っていたら、モデルのお仕事に出掛けるでしょ。どこにいても...一人は嫌。でも...今日、目が覚めたら...隣のベッドにあおちゃんが居て。嬉しくて...。それに、お天気も良くて...嬉しくて...早くあおちゃんにも見てもらいたかったの」

いじらしい彼女の姿に、ぼくは眠気もすっ飛び、早く用意をしないと、朝食とピクニックに持参するメニューを頭の中で考え巡らせた。

朝食はトーストと、果物に、紅茶。

「本当にこれだけでお腹好かない？」

という問いに、こゆりはフローリングのダイニングで、ピンクの、花のコサージュスリッパを履いてくるくる舞い、落ち着きかない。

「いーの。公園で沢山食べるから。だから、沢山作ってね」

「はいはい。お姫様の仰せのままに」

ぼくは苦笑しながら、サンドイッチ作りを始めた。ぼくは、これでも料理が好きだ。スマホの動画を参考に、色んな料理に挑戦する快感。モデルの、仕事上のストレスを、発散するのに一役買っている。

「倉庫からバスケット、ほら、発掘したの」

こゆりが、ぼくの姉の部屋に入り込んだのか。こゆりが今履いているコサージュスリッパも、素足でベタベタ歩くこゆりの、小さな足を保護するために、ぼくがカオス...いや、姉の部屋から発掘したものだ。

ぼくがバスケットの中に、飲み物や、軽食を詰め込んでいる間、こゆりは部屋に戻り、いつもの白のキャミワンピースに着替え、ピンクのストールを羽織ってぼくのもとに来ると、

「^{みどり}翠さんや、^{かい}甲斐くんも一緒だったらもっと楽しくなるのになぁ」

「い...や、あの二人が揃ったら、宴会騒ぎを起こしかねない。ぼくは、こゆりとふたりでピクニックを楽しみたいな」

想像しただけでも、姉さんと甲斐が揃ったら、飲み物は紅茶ではなく、焼酎一升瓶に変化するし、

軽食も刺し身や揚げ物などに化けるだろう。

そんなの、絶対嫌だ。

「こゆり、みんなバスケットに詰め込んだから、ぼくは着替えてくるよ。大人しくしててね」

「...はい」

こゆりが返事をする、バスケットの中身を確認している。ぼくは笑いを噛み殺しながら、部屋に入り、白いコットンのシャツと、空色のデニムパンツを履き、大きめのサングラスをシャツに引っ掛けた。メンズ雑誌のモデルをしているぼくは、出来るだけ正体をバラしたくない。

『何処にでも居そうな人』

それが、休日のぼくのスタンスだ。

ぼくは、再び部屋から出て、キッチンでお水を飲んでいるこゆりの、頭の上に口づけた。

「さ。行こう、こゆり」

バスケットを受け取り、こゆりの手を握ると、気恥ずかしそうに微笑むこゆりと家の玄関を出た。

今日は、とことんのんびり過ごそう。

《こゆりSIDEに続く》

ご拝読有難うございました。

※こちらの作品はnoteのクリエイター同士のコラボ作品となっています。

文 ふありの書齋

イラスト 月猫ゆめや様

月猫様、わたしの我儘な要求にも親切に受け入れて下さり、とても感謝しております。

また、コラボ作品が実現出来たら素敵だなと思っています。

心より有難うございました。

次作はこの、『午睡とピクニック』のこゆりSIDEになります。配信は明日の日時変更後となります。読者の皆様、どうぞお楽しみにしていて下さい。月猫様の描いて下さった、儚げで可憐な、こゆりのお姿をご披露出来ますので。

それでは皆さま、また、こゆりSIDEでお会いしましょう。

ふありの書齋

